



▲八木沢の五礼橋下の岩場での記念撮影

## 遠い昔の夏休み

この写真は、八木沢の五十嵐 恵子さんからお借りした約80年前の写真で、只見の夏の様子が記録された大変貴重なものです。この写真についてお話を伺ったところ、この頃はカメラはほとんどなく、会津若松市で写真の勉強をしていた人がお盆に帰省され撮影したものではないかとの事でした。プールも無かったので子どもたちは川が絶好の遊び場だったそうです。



▲夏になると男の子は叶津川で泳いだそうです



▲避難放送を聞きわけ集会所へ避難

## 水 小川地区で 害を想定した避難訓練

7月6日(日)、小川地区では水害を想定した避難訓練を実施しました。約120名の住民が参加し、洪水や土砂災害発生時にスムーズに避難をする事が出来るかを区の役員や消防団の誘導のもと実際に集会所へ避難して確認をしました。昨年に引き続いての訓練で、毎年繰り返し行う事で防災意識の向上を目指しています。

## 小 郵便局 学校にサッカーボールを寄贈

只見町の郵便局では、ワールドカップで使われたサッカーボールのレプリカを町内の小学校にプレゼントしました。これは、ゆうちょ銀行がワールドカップのスポンサーとなっており、全国の郵便局が地域の小学校にボールを寄贈しているもので、只見郵便局では6月27日に只見小学校を訪れ、渡部局長から児童を代表して目黒 拓海君にサッカーボールを手渡しました。



▲渡部局長からサッカーボールを受け取る目黒君



## ブナセンター講座

# 「只見地域のヒメサユリの分布と生態」

## 6月21日(土)



ブナセンターの企画展「絶滅危惧種ヒメサユリのすべて」に合わせて首都大学東京・客員研究員の大曾根陽子氏を講師に招きブナセンター講座を開催しました。大曾根氏は、町の「自然首都・只見」学術調査研究助成を受けて、ヒメサユリの調査研究を行っており、講座ではその成果を発表されました。

まず「ユリ」とは一体どんな植物なのか説明があり、日本で咲くユリは5つのグループに分けられ、特にヒメサユリやヤマユリが属するグループは、ほとんどが日本固有種で、アジア地域と日本の一部地域にしか見られないそうです。そんな日本のユリの中でも、ヒメサユリは、日本海側の雪が多い地域に咲き、只見町は、ヒメサユリの生育地のほぼ南限で浅草岳や、定期的に刈り払いが入るスキー場などに生育し、可憐な花を咲かせる姿が、町内の高地から低山地までの広い範囲で見られます。

多雪地に生育するヒメサユリは、初夏にその花を咲かせ、他のユリが盛夏から晩夏に花を咲かせるのに比べて開花が早く、春の雪解けとともに芽吹いてから1カ月ほどで花を咲かせます。なぜ早く開花するかというと、翌年に咲かせる花芽を秋のうちに作ってしまうからです。それに比べ、ヤマユリやオニユリなど、雪が降らない地域にも広く分布するユリは、その年の春に芽を出してから花芽を作ることでした。これは夏の短い多雪地帯で生き残る為だと考えられます。



▲当日は町内外から35名が参加

只見町には、「自然の生育地」と「定期的に刈り払いが入り管理された生育地」の2箇所があり、人の手により管理されているヒメサユリは全体的に大型になり、花つきも良くなりますが、果実に虫による食害が起きやすいなどのデメリットも確認されているそうです。

## 自然観察会

# 「開花中のヒメサユリの自生地を訪ねる」

## 6月22日(日)



▲ヒメサユリの花

企画展に合わせた自然観察会では、はじめに、間近でヒメサユリ見ることができる百合平で、開花中の花を観察し、香りなどを楽しみました。ヒメサユリは、種子がまかれた翌々年に初めて1枚だけ葉が出ます。ゆっくり時間をかけて成長し、花をつけるまでには5年以上かかる花です。観察会では1枚葉の状態、複数葉の状態など成長の様子をじっくりと観察することができました。

続いて、入叶津の人手の入らない自生環境で咲いているヒメサユリを見に行きました。雪どけの遅い川岸の草地の中に数本のヒメサユリを見ることができました。雨が降る中での観察会となりましたが、可憐なヒメサユリの花を楽しむことが出来ました。



▲雨の中16名が散策しました